日本 T. S. エリオット協会第 5 回研究会（2026.04.12）

「日本 T. S. エリオット協会研究会」のお知らせ

日本 T. S. エリオット協会では会員相互の交流と新しいエリオットの読者層の開拓を目的として、「日本 T. S. エリオット協会研究会」を年 2 回開催しています。通算第 5 回となる今回は、札幌学院大学の中村敦志先生をお迎えすることとなりました。今回は第 4 回にひきつづき『キャッツ』に関連し、エミリー・ヘイルとの関連から作品の背景を掘り下げます。エリオット協会会員に限らず、本研究会に興味のある方も参加できますので、お知り合いやご指導されている学生をお誘いいただいて、ふるってご参加ください。

日本 T. S. エリオット協会第 5 回研究会プログラム

2026 年 4 月 12 日（日）16.00-17.30

オンライン（Zoom）

司　会　　松本　真治（佛教大学）

【講演】 16.00-17.30
エミリー・ヘイルと『キャッツ詩集』―創作の起源と変遷の再検討―
中村　敦志（札幌学院大学）

◆エミリー・ヘイルと『キャッツ詩集』―創作の起源と変遷の再検討―

『キャッツ―ポッサムおじさんの実用的な猫の本』（*The Old Possum's Book of Practical Cats,* 1939）は、エリオットが名付け親(godfather)を務めた子どもたち、あるいは友人のために書いた詩であると一般に理解されてきた。筆者もこの通説を否定するものではないが、本発表では、同時期にエリオットがエミリー・ヘイルに宛てた書簡の中に、猫を主題とした詩が含まれている点に着目したい。

特筆すべきは、エリオットが、上述の子どもたちに詩を送るよりも早い時期に、ヘイルに猫の詩を送っていたという事実である。この執筆時期の前後関係を念頭に置くと、エリオットが「猫の詩」を書き始めた真の契機は、実はヘイルとの個人的な交流にあった可能性が浮上してくる。

さらに本発表では、初版刊行から 14 年を経て出版された増補版（1953 年)において、なぜ新詩「キャット・モーガンの自己紹介」("Cat Morgan Introduces Himself")が追加されたのかという問題にも光を当てる。この増補の背景についても、ヘイルとの関係性を手がかりに、新たな解釈を試みたい。

本発表は、The International T. S. Eliot Society 編集の論文集（2024 年出版）に掲載された拙論に基づき、『キャッツ』という作品をエリオットとヘイルとの関係から捉え直すものです。当日は、ご出席の皆さまからの率直なご意見やご教示を賜れれば幸いです。

◆　登壇者略歴

中村 敦志（なかむら・あつし）
札幌学院大学教授。甲南大学大学院博士後期課程単位修得満期退学。カリフォルニア大学バークレー校客員研究員（1998-1999 年）を経て、現職。T. S. エリオットおよびマーク・ストランドを中心にアメリカ詩を研究している。
所属学会： 日本 T. S. エリオット協会、The International T. S. Eliot Society、日本アメリカ文学会、日本英文学会。

【本発表の基となる論文】

Atsushi Nakamura, “Emily Hale and *Old Possum’s Book of Practical Cats,*” *The T. S. Eliot Studies Annual,* Vol. 6, eds. Frances Dickey and Craig Woelfel (Liverpool University Press and Clemson University Press, 2024): 159–167.